

## いわたきーいわただ

い

**いわた さんし 岩田 三史**  
明治23.12.3—昭和48.9.3 (1890-1973)  
川口市長・貴族院議員。川口町(川口市)生まれ。川口屈指の大地主・岩田家の長男。浦和中学校、第四高等学校第3部(金沢大学)を経て、大正8年(1919)九州帝国大学医学科を卒業した。卒業後、医学部副手として医学者・研究者の道を歩んだ。さらに、東京帝国大学医学部細菌学教室研究生となり、医学博士号をとり、その後帝国女子医学薬学専門学校教授、額田内科病院副院长になった。昭和6年('31)地元川口の有志に請われて政友会の支部団体、政交会の会長になると同時に、貴族院議員になり通算8年務めた。8年('33)川口市会の政友派に推されて、初代川口市長に選ばれた。川口町と横曾根・青木・南平柳各村の合併に尽力し、8年市制施行と共に初代川口市長に就任した。市長時代には学童の血液検査を実施すると共に、遺族会会长、県労働争議調停委員長を務めた。日中戦争勃発後の15年県遺族会長になったが、同時に戦時体制の役職に就任した。同年国民精神総動員埼玉県本部理事、埼玉県精勤実践協議会委員、16年大政翼賛会埼玉支部顧問、17年県翼賛壮年団県本部副団長を務めた。19年には発足直後の埼玉新聞の社長も務めた。敗戦後、公職追放となり、一切の公職を辞した。第四高等学校時代からスポーツ選手として活躍した。柔道は4段である。学生時代に、当時まだ珍しかった野球に親しみなこともあり、川口市に野球を普及させることにも力を尽くした。34年川口市名誉市民第1号に推された。享年82歳。

118

**いわた しかたろう 岩田 鹿太郎**  
明治1.1.9—昭和30.5.1 (1868-1955)  
県會議長。高山村(飯能市)生まれ。市平の長男。埼玉県師範学校卒業後秩父郡下の訓導を務めた。次いで済生学舎を卒業、軍医として日露戦争に従軍。後、国神村金崎(皆野町)で開業、大正13年(1924)憲政会に属し、県會議員に当選した。昭和7年('32)、11年にも当選、同13年第42代議長に就任した。資性重厚で誠実、責任感が強く、反対党からも尊敬された。なお県医師会長としても活躍した。

**いわた そうひ 岩田 双飛**  
不詳—明和6.10.11(1769)  
江戸時代中期の俳諧作者。大里郡寄居町生まれ。通称彦兵衛。絹仲買商を営む富裕な商人。初め俳諧を白兔園中川宗瑞に学び、免雪と号したが、後建部涼袋の有力な後援者となり、俳号も双飛と改めた。子孫の泰明堂岩田家には多くの涼袋書簡が伝えられていた(早稲田大学所蔵)。双飛の撰として出版された『俳諧いせのはなし』は涼袋が伊勢派の俳諧の宣伝に努めた書として重要である。

**いわた だいがく 岩田 大学**  
生没年不詳  
江戸時代後期の神道家。秩父郡吾野村高山(飯能市)生まれ。名は吉弘。高山不動尊別當常樂院配下相本坊の修驗。幕末の国学の興隆の中で、京都の神祇管領吉田家の神道伝授を受ける。安政4年(1857)3月「開運五行録」を著わし、高山に鎮座する三輪神社を中心とする高

山神道を首唱した。

**いわた としこ**  
明治21.4.25—昭和  
婦人会指導者。川口  
岩田武三郎とイヨの  
長岩田三史の実姉。  
和高等女学校卒業  
学。大正12年('23)  
雄と結婚。昭和8年  
日本国防婦人会(日  
れると、いち早く日  
国婦組織化の動きを  
の「生みの親」とい  
の花柳界の人々を一分会を発足させ、  
方本部を設立、副  
就任した。同15年に連  
合分会長にも選ばれ  
会の指導に当たり、  
を務めると共に、2  
絡協議会の発起人に  
同21年日本自由党議員出馬の声も高  
した。享年62歳。

**いわた はんごぞ**  
寛政9—文政13(1797-1820)  
江戸時代後期の新嘗  
主。先祖の岩田河内  
天正10年(1582)祐  
岡勘十郎を打捕えた

**いわた ひこすけ**  
不詳—享保19.5.18  
江戸時代中期の川越

埼玉人物事典

H10.2.25  
終行

早稲田大学  
出版